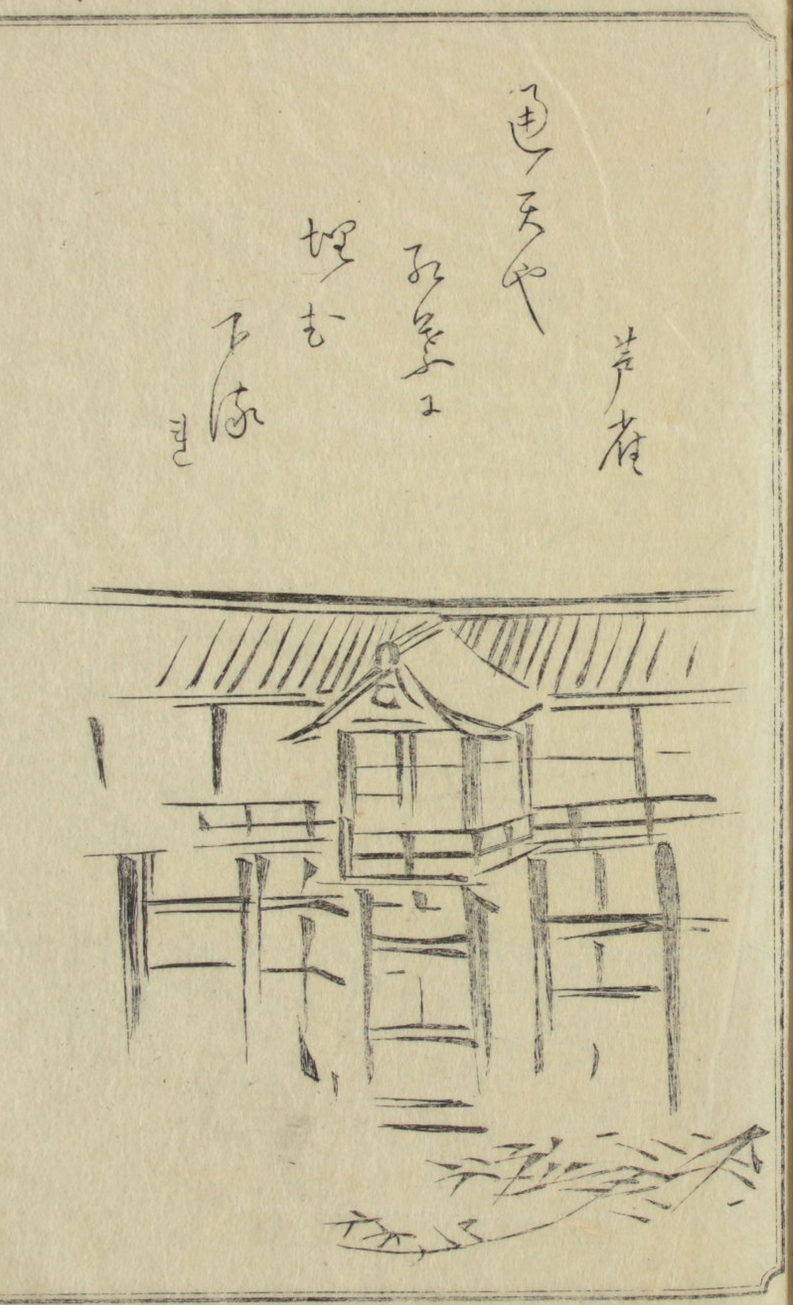
日本名所風流千景集　卷ノ十

中村俊定文庫
文庫 18
923
10

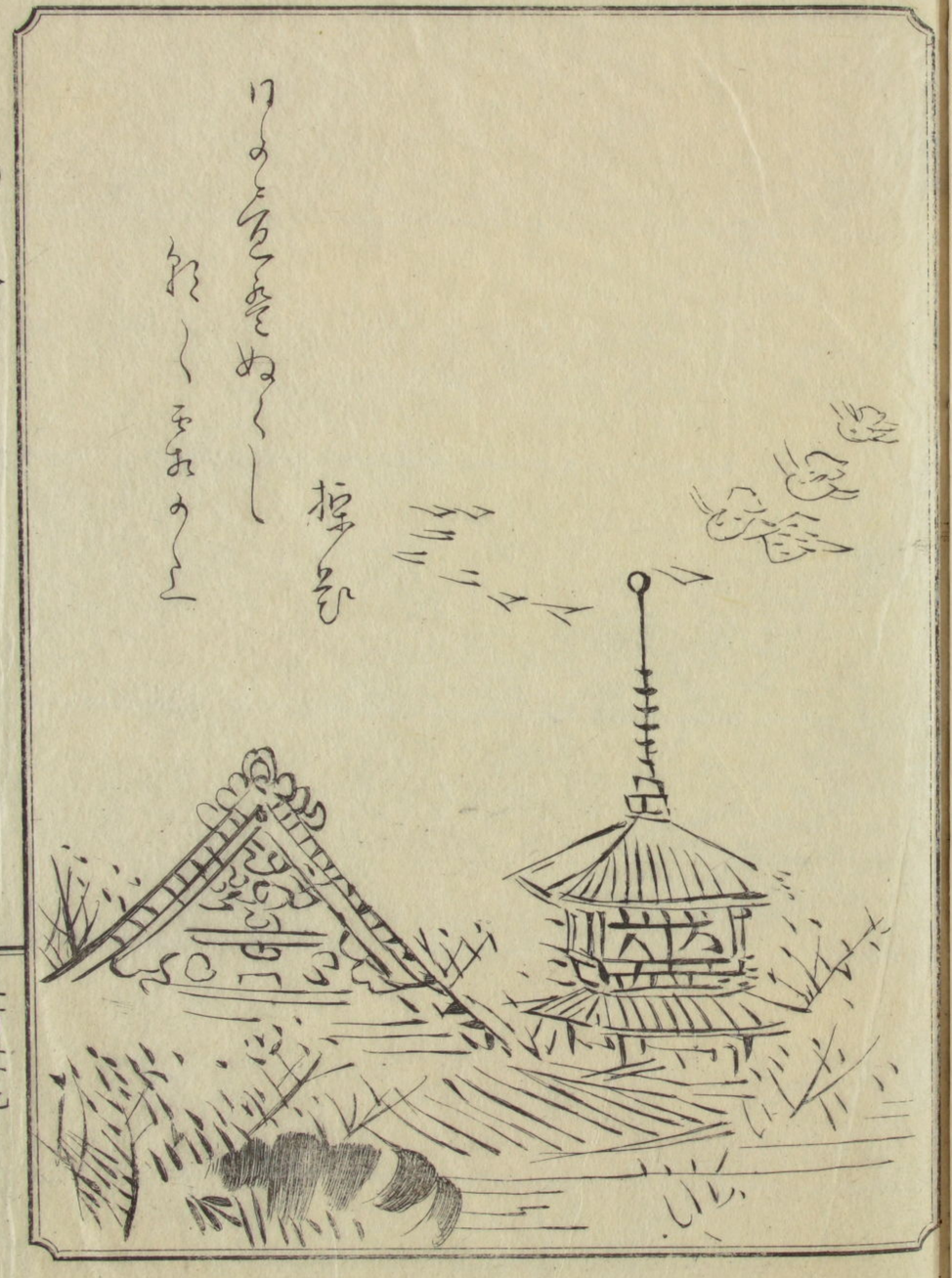
東京名物大久保村櫻草

渡邊柳汀

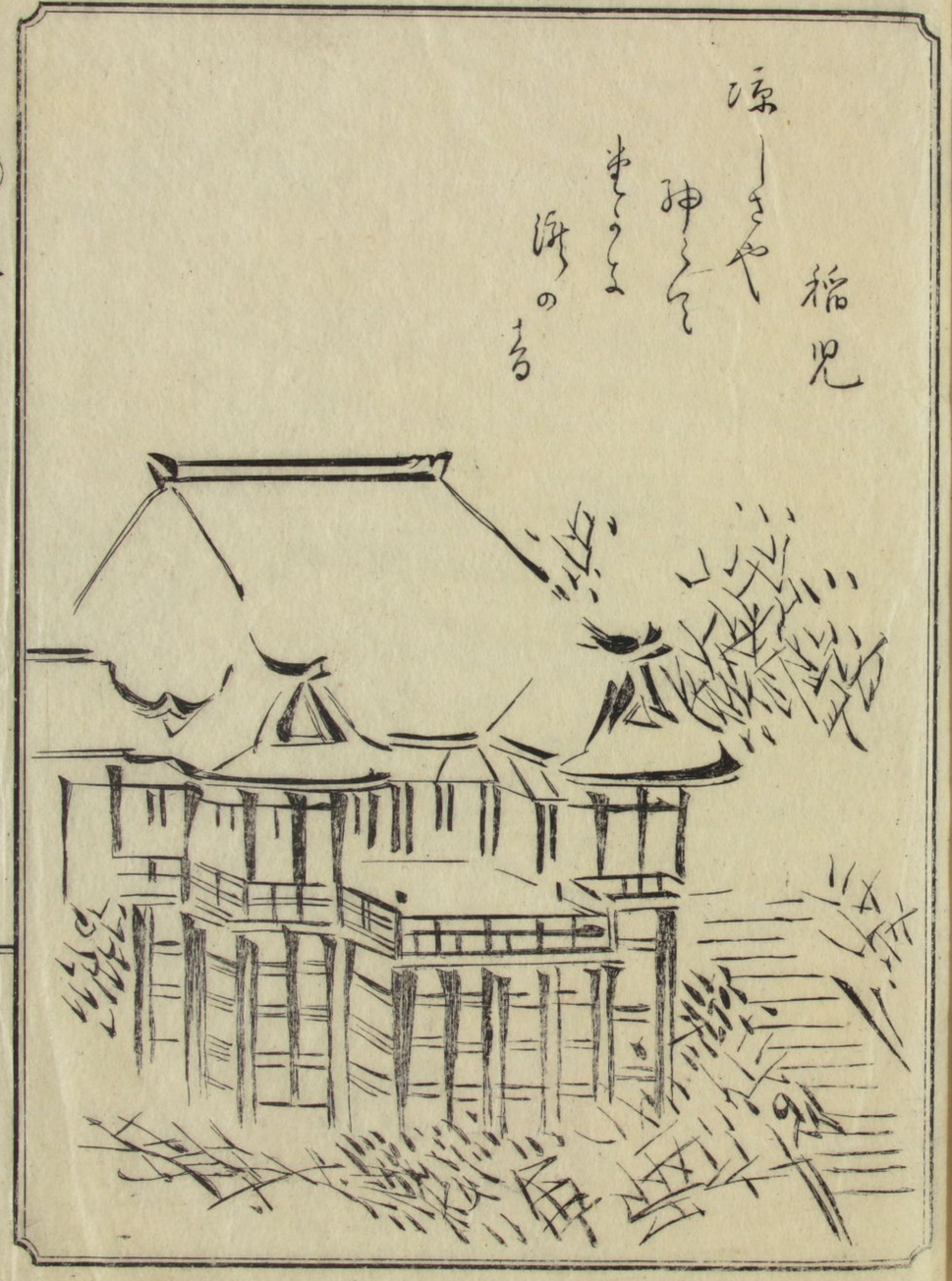
中村俊定文庫

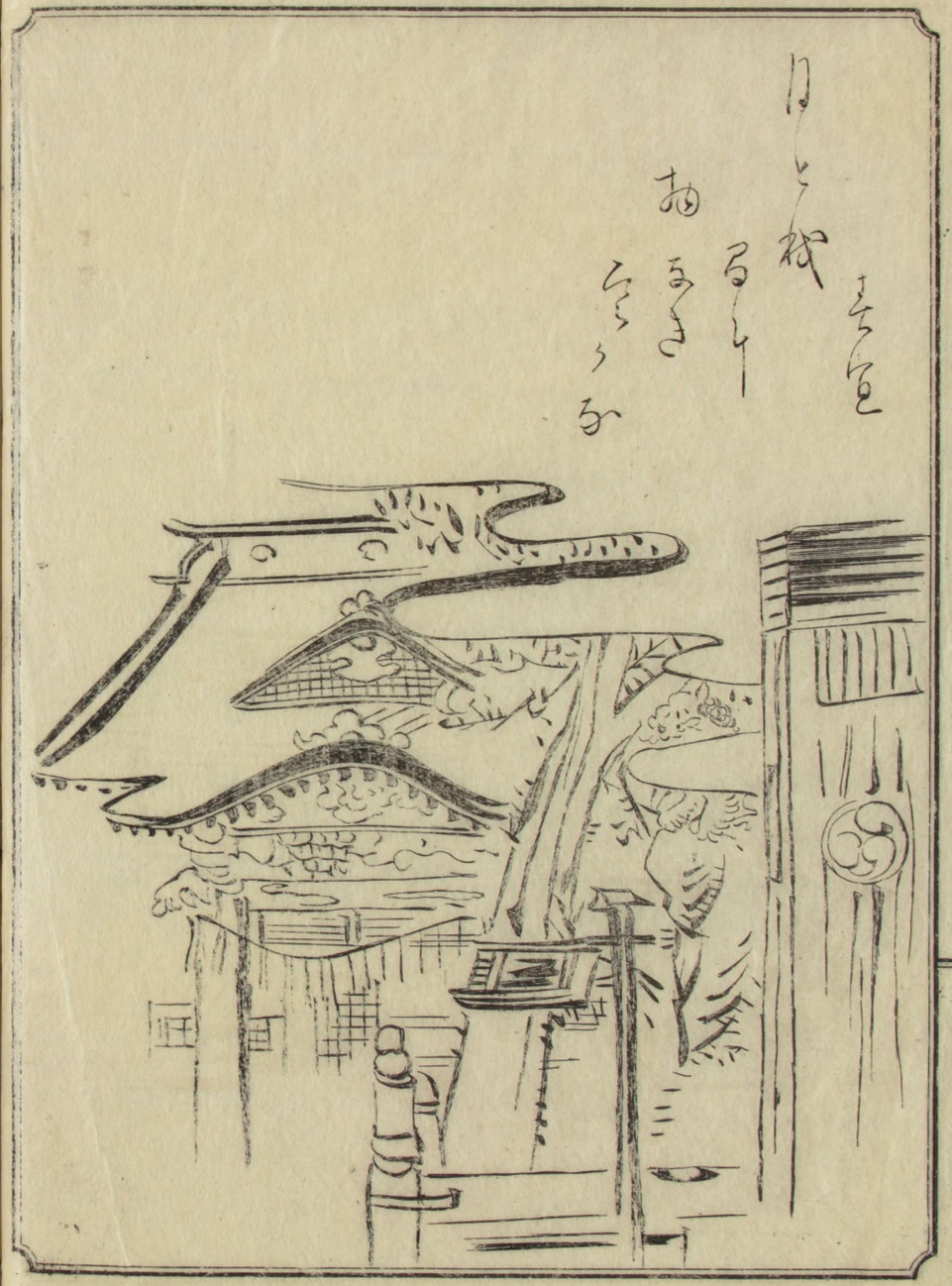


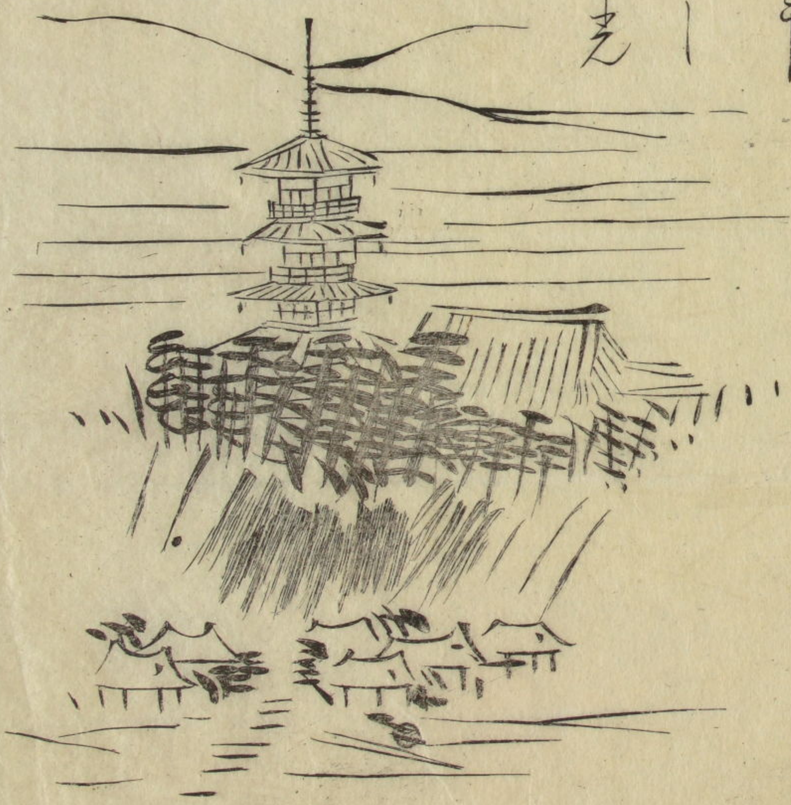
神の紅の迹し
床し偲ぶ
松堂


けの雲をぬくしし
ぬくしぬるみのこと
探花

石丈

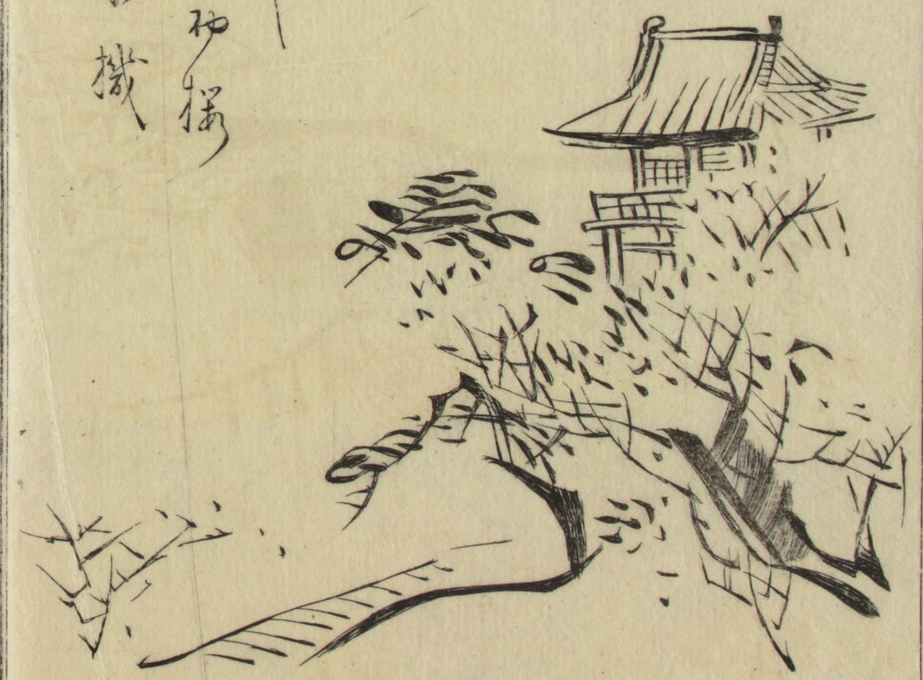

稲児





東京名所隅田長命寺景

京都名處三條橋



擬観風播十五勝之記

夕紅の宿をたづけん五條さうろいつきの通りて伏鉾と名よ立る五條中島八京都俗呼道場八移轉ありしぬ地名加茂川言源の二流よ狭宮家八四層橋よ味さう是場茂よ立まりぬ橋を等けて観風橋とふ這八是場より發明の学殖と世よ名く記念ことさんとあり橋よのぼれ名彫古駒お観海望いつ年も花海の名匠彫地ふらさるなくいそや法橋の名称を数へて名人と稱世都然明を新メよ古ふ古恵を四時よめくくしよ孰社を言葉そいつれを採らん光勇を遥よ是波せを東方の毒の那方よ言く宅川の一帯を蓋よ布るハ国家擁護の四方陸水八惜言の鏡中りの底やそそ仏山の教ひ法ふの法ふ勇猛のたをハ名ふも自然と時ひ立れる眼下よ鑑鍵ととして一條の玉帯を引くく大津よ通ふ流車の煙ふそ金の渕とも思ふ仏寺ハ地を徹して喫驚さる笛琴ふ心耳も浸ふれ来よ向ひよ二ツ峯ふ時ふ橋を通ふ仏法の地の峰典公の神霊を産めそ樹樹言ふ家ふ蒸賀と武霊あるぐ如く山ふ言ふの〳〵共〳〵ふ仏法を墨ふ和ふ言ふ無ふ仏法ふ法ふ法ふ月

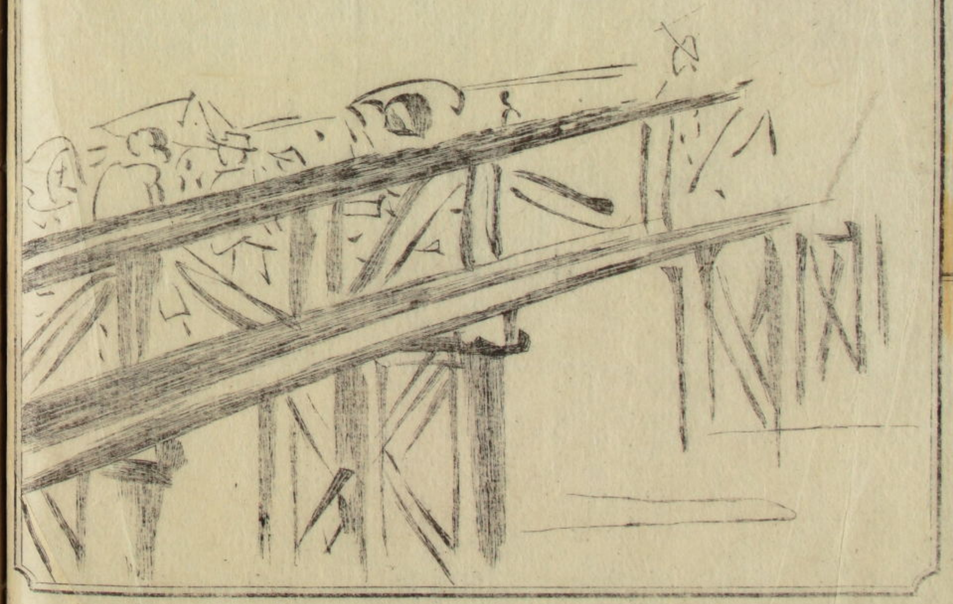
を行つて又いつまの呼はらひつるへきやと畏をうんぬ八幡宮神廟に詣し
て靈舎那の大殿あり華嚴經四夕に唱て妙福寺明の成りを学んぬ又
俗稱の一樹味とふ古へ古う唱ふ長如の古の五條橋あり俗稱
として車馬殊に繁昌して人跡を風流の名勝形狀万態大抵や
彷つる清水へ寺賽たる天然清水の高所山ちの繁の光り本ぶたる樹
木に茂り雲樣の濃り山巒たる唐塔に登れば薩摩灘
て霞たる筑の東山ちの方に望む豆を偃へ樹間の高橋屋閣八角の人
を招くの酒旗翻翻として鬱ひ樹こう樹こう樹ちあるは花頂の鷲に
して繰り流るるに茶に早すれ番煙飛て梅の頃春に茶ちり水方
畔の止まる雲叡岳の靈場にして峨々たる秋の清水へ真にして
華嚴を壓し絳霞粉映雖雨雲煙いつまへあれども夕の紅毒の夕
雲なる雲の景色八宮ともいうて叫ふへきに叡岳に多ぶ山に西方連山波狀
の中一郡をまき杉の木立に火災流弦の清新粉軍地義の音跡事宮の
強軍に て晩雲一帯恭を裏社八一帳の西圓目おまるり咲ぶあの七宮

は何をうたるや唖こと〻して窟りを求もる茅舎に結ん建仁寺社に集り船と
雛と喋喋乱唱かゝおきも又紅あり吋既に昏れて四條橋畔の酒肆を
捉らへるもの低徊まり涼庭に伝り数茶の焔光連夜の煙火又は横の壯
観まして毛唇雄の下流を交れと敢て濁りの色に清ぬか茅川社清き
流に枕して琴を焚き鄙を賣るの階上に倣を仮に三石の高言茶又
文房の四友以て古へを語り今を論じ談清話嘆に徽じ言徽の歌乃
に耳を藝の古て俳優の古味といふへくおや仰止蘇の畜といへるい融の大臣
の別業なる河原の西院の回跡にして奥の松島を稱されるる時は地を埋電ふ
る蘇の畜まあるへ〻へて此名に送ると云ふ伝ふる生説のすしあるを
されとも今い一本の板あるて枝葉繁茂し其地の葉りを接るに似さ
さいに色をも一緣のうちに選ぶて併を接る変紅風樣の十五緣と多りぬ
緣區既に完まるいのて之に著きる吟詠多〻んやと勿を広恕まもと
めて風雅の一軸といふ〻ぬ

成この友ものせ〻 故再ひ誌す　花こ和　稲雄

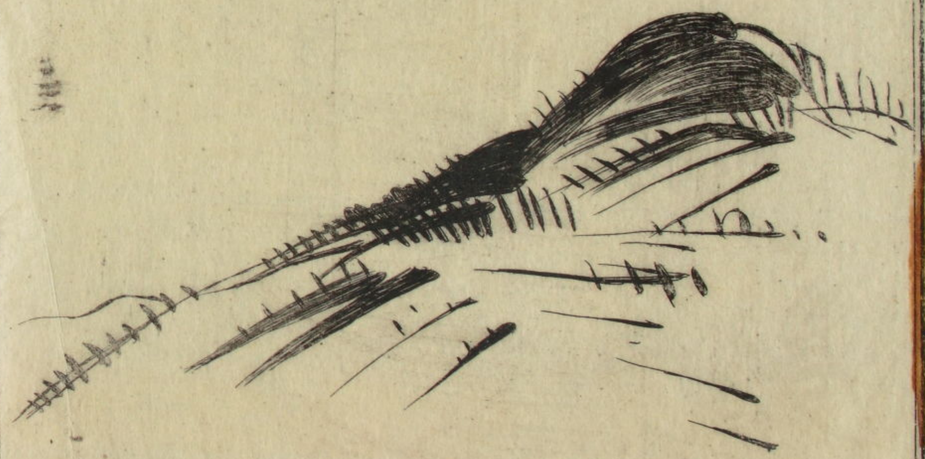
大仏の福
もぐら
ありの
まぶつ

芦花

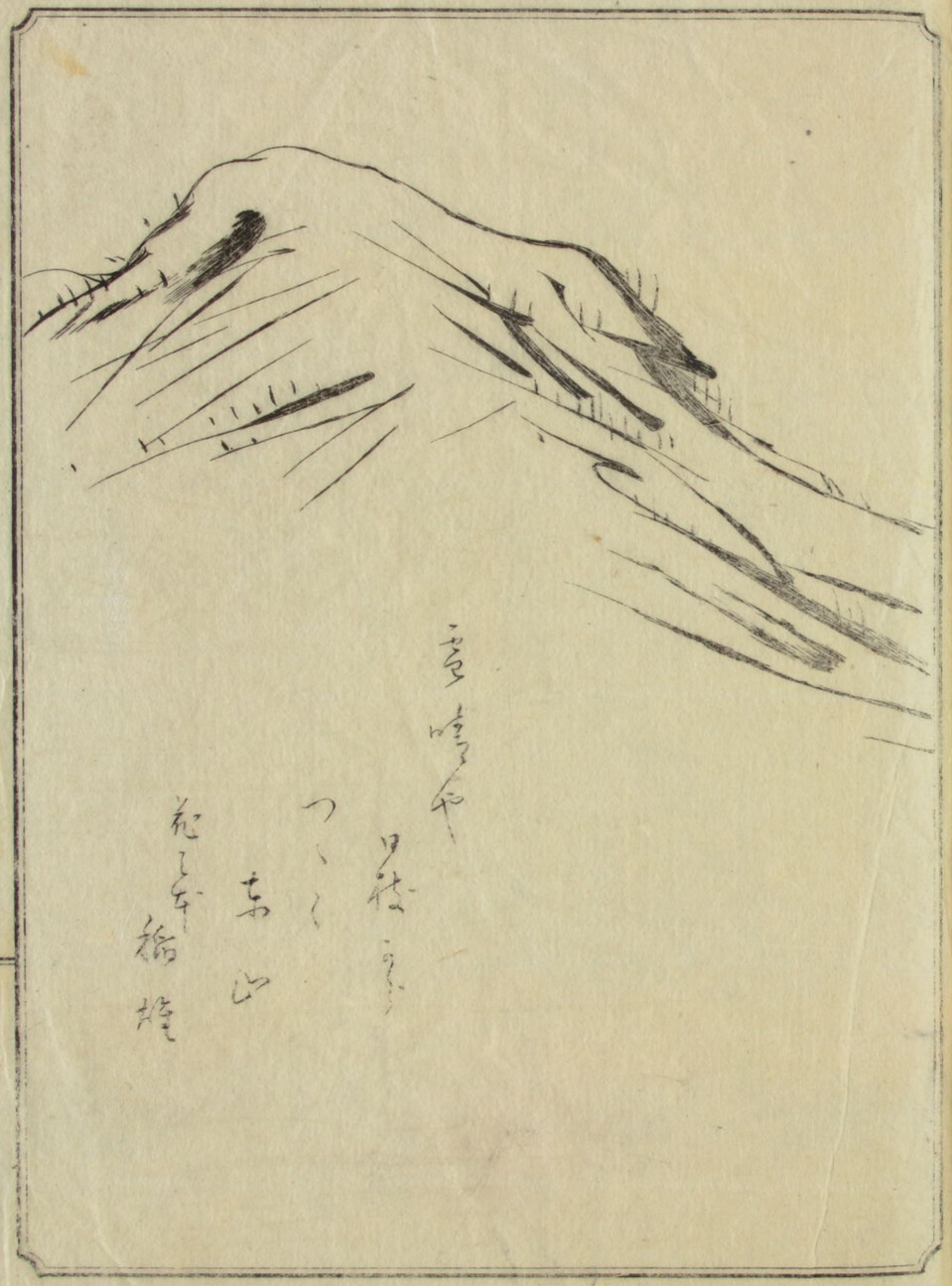


八相の鐘

指月



門前や
今宮の
昔の人通り



京都　花十五勝　自八勝　至十五勝

あゝし山　稲雄

勝ゝのしき中ふ　静かし花心

市室　仝

笠の作見せ　ありり　岩橋

紅葉院　仝

京とつゝ稲ひ　こゝせて花盛

清水寺　仝

西の滝より　あふ桜の滝

勧工　仝

枝ゝを実て　ゝ上る櫻のゝ

平野　仝

花ゝ手ゝ　揚中死善賢像

祇園　仝

夜桜や花の　稲雄　酒樽

御室流　稲雄

世の花のあるとは
人こそ花の庭

大谷　仝

澤の家の人家
あるかり花の雨

自輪　仝

うすまさ　仝

嘆りて咲
時るも桜哉

日も花の盛り
おむの雲迄

仝園を返し　仝

帥新堂　仝

筆蝶の深かて
気なるき櫻哉

車中と矣て
現くさくさ花

嶋原　仝

雲雀天社　仝

桜低く折て
去や夕桜

松尾は社更
多く桜の車

大堰川　花筏

川波の
流れの
身の桜

帥苑　仝

八方一帆の
道や八重の雲

紅葉谷　仝

山の
高き見

自稱寺　仝

地蔵きの
身や百ち

秋澤　仝

吹清き
鏡の
如し身の池

阿弥陀峰　仝

大谷之
迄けて
月

加茂川　仝

身然や
やゝ
東山

建仁寺　仝

雨上り
身の
車

金閣寺
揚縁の手摺噛るや庵の雪　稲児

清水山
欄干の雪ハ明ほのゝ舞台かな　仝

円山
夜ゝの時雨のやまかり雪の肌　仝

霊山
見当りのつのゐ丸色や鐘の音　仝

花頂山
山州の一際高し雪景色　仝

神泉苑
雪しし神の御池ハ深さかり　仝

三本木
琴の音漂り嘆かる雪見かな　仝

嵐山
堤ゆきる雪動くや大悲閣　仝

皇居
尽るおも千深ふ神としの光の首り　三條 道成

都のまちありて月と花　山荘

大峯やかさなむやうれむしの声　軽海

多三年
道ぬ
三笠山
大和 松琴

しま原
入り千句の名ある柳かな　稲雄

於京古石思倣ゝ両
逆旅
秋風や宗牛
廣立の枕ゝ隠る
東 鯨衣
八名村にて
朝皃や日和
新たる
人心
布ヶ濱にて しつ志清
あれりそ
やゝ泥
つゝ牛
浦の
ゆふ
ほうらいや
錦帯橋の
東京 丹蒼
新白う牛
風の名をとゞ
あし来や
早嬰
月岬
斗う理刈
武さし
志やう木

諏訪湖にて
湖をかさね仕舞ふ
寒いの稲
とかり 梨水
あさま野原
廣まさつ馬の声
与や浅き泥
信中 修記
菜の花や
何処まで
越後 雙月
少ゝ来
宇治の里
清水掛て
まゝしきの
まさゆきを
きの津にて 芦雀
孫首との襟ハ
えうや
冬の音
志ろし
絵ハ 水音
梅のちか

翁碧楼にて
宿に来て嬉し鶯(ウコ)
隣史新茶時

信吉
近江 一水

時鳥や
衣もやうやうも

ふと猩の蝦夷に登り
夜さへもなき先や
蔵かな月涼し

岩代 葉自

まゝ家や生の
鶯や春をおしまぬ
初音かな
木鶯(ウコ)

名ある者清水寺や
春の月

信の いせ女

摂津稲ニ社
何も粋置ぬ菜の
こつゝ家の前
所(ヒタチ)夕
平石に
蝶の来て
框ふ
日もあり
春の海

筌塚
依 無仙
精も
倒して
りぬ
秋の風

古稗ニ国地
人あゝ行
花くて
広く成
破(サスキ)涛

加賀
山
千鳥屋人
冬花

越后
梅
よけり
童
年もや
ましの諸

松に咲やさくらの
いふし山
世話 梅祐
日の入の色よき
居れ
浪山寺
須广に於いて
花の手ハ吟行
ちられ一重の寄
五閑
年寄も
極
ゟせて
蔵り
浅瀬
金澤 葉仙
の尓
於中 子亭
田よ山まて
月さしていよし
清し稲の春
芸石 梅竜

北野社
日よ月ら月牛
世話 梅童
芸ゟらぬ梅の花
大原や一夢
和泉 蘭立
ことる春の鶴
笹の葉ちらつる
船のあつさ
うね
早野 亀水
芸多や
京まも
ゟへぬ
売
浅め
金沢 慕頼
長常まや雲尾
うけて梅の宮
蔵 駿

沼宮内にて
鶯の静まり切て啼にけり　鶴舟

江坂し
橋もなし江戸の名物の繰り菜　東京 丹蕾

和多浦にて
蓬や人をみて又晩の露　羊陸 静石

あき窓あきても
ぬれても知らぬ帰り雨　錦嶂

雪中の古き峰もあき程も
恋塚の芒や鬼の首の泪　いりて 菁岳

奥正寺にて
山吹やあられへとく咲あまり　東瀧 采之

柳照や律も虚ろも月の子　大坂 桜枝

卯の浜にて
谷めぐり来る風

花さき刈すぎし
夏座敷や誰旅寺　山形 の宗

東京 龍文
帰宅にて
裾引て彼岸もと聞く桜の句　稲雄

信ノ
さのの書　横紫

遠白川
菊の花衣の袖より　オワリ　杜若
都とて見
思ひ出て
たつ野末し　杉下
新にて
神のすゝ負　無的
木槿の
盛りかな
若葉ちりて
富士を氣高
く聳えたり
葉ヶ日にて
東禄青
けふの
未来を
語終のおと
稲児
二度若
ゟ
横濱
仙筆
五十年
翁りし

跋

千山万水を逍遥して紫雲に魂を養ふは風雅の主眼なり地理人情を詳にし方語を明にするも亦風雅の主眼なり祖翁は生涯を平和(?)の世にて一世の風流百世の師とさへなる如のまゝ稲雄一たび俳域に身を投してより晩年は笈を負杖を曳て東西に奔走あり然れども國土の廣き名勝の多き未た半をも歴ず殊に雅俗に聞なきもの見尽し詠せ飽くの業

得んや故に願くは四方の法士を仰ぎて
千景集の企成り茲に梓に上せ事と
なりぬ千山萬水まこんて机上に俯ふ豈ひと
り稲雄の思ひ遥るのみならんや四方の法士
も亦其土に旋ふの想ひあらん自他の共ひ
共に增す事ひとへに願ふ所なり敢て序
もしらせぬ

權大教正
花園法主 本稲雄

明治廿六年一月二日印刷
仝　年二月六日出版
京都市京区五条橋西詰東入
都市郡第一區戸
長大教正
編輯者　服部稲雄
右仝所仝當
發行兼
印刷者　服部榮太郎